

一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活動分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生のビジョンを抱いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介します。第5回は、

原爆被爆者の自分史を掲載した『自分史つうしん ヒバクシャ』の発行者である栗原淑江さんにご登場いただきました。

聞き手は、編集委員、社会学研究科の足羽與志子です。

被爆者に教わりながらの歩み 自分が納得できる人生を求めて

原点は、ゼミでの被爆者生活史調査。
被爆者の方々が苦しみながら心の思いを口にしてくれた

足羽 栗原さんは大学生のときから三十数年にわたって原爆被爆者の経験の聞き取り調査と支援活動をつづけてこられました。そのお話を伺う前にまず、栗原さんが入学された1966年当時は、女子学生はどのくらいでしたか。いま一橋大学の学生の30%は女性ですが…

栗原 私の学年で7人、一学年上は4人でした。周りは男性ばかりでしたが女性扱いをされた覚えはありません。女子学生といえば津田塾というイメージ(笑)。

足羽 長崎の被爆者の方々とかかわるようになったきっかけは？

栗原 当時一橋の石田忠先生が長崎の被爆者の方々の生活史・精神史の調査を行っておられました。私は石田先生のゼミを志望したのですが、「長崎で原爆被爆者の調査をするゼミで、合宿になるから女性は採らない」というウワサがあったんです。でも、どうしても参加したかったので先生に直談判にいったら、あっさりOK。3年生になるまでに読んでおきなさいと、『原爆の子』や『広島の記事』など原爆に関する本をいくつか紹介していただきました。

足羽 入学前から被爆者の問題に関心をおもちだったのですか。

栗原 特別に強い関心があったわけではありません。私が一橋大学を選んだのは、人間と社会に関する勉強がしたかったからです。中学・高校時代にロマン・ロランやマルタン・デュ・ガールなど第一次・第二次両大戦間の時代を舞台にした小説を読んで、戦争のなかで変質していく人間像に衝撃を受けました。世の中が戦争へと傾斜していくなかで、それまで平和主義者だ、社会主義者だと言っていた人たちまでも、どんどん戦争賛美に変わっていく。そうした人間の変わりようが、非常に恐ろしく思えたんですね。当時の私のなかではまだ明確なたちはとっていませんでしたが、戦争とはいったい何なのだろう、人間らしい生き方とはどういうものなのか、自分はどう生きていったらいいのだろう、といった疑問を強く感じていた。大学で勉強し、自分なりに答を見つけたいと考えていました。石田ゼミを選んだのも、社会という現実の場で人と接することができるゼミだったから。原爆に関しては本当に無知で、先生に紹介していただいた本を読んで、自分が何も知らなかったことにショックを受けました。

足羽 実際に被爆者の方と接し始めたのはいつですか。

栗原淑江 (くりはら・よしえ)

1970年、一橋大学社会学部卒。在学中から被爆者問題に関わる。

卒業後、社会調査室の助手を経て、

日本原水爆被害者団体協議会の事務局に事務局員として勤務。

1991年、同協議会を退職。社会保険労務士の仕事のかたわら、

被爆者の自分史を紹介する『自分史つうしん ヒバクシャ』を発行しつづけている。



栗原 具体的には3年生の8月に長崎に行き、生活史調査に参加してからです。その時からずっと被爆者に教わりながら歩んできたというのが実感ですね。このときの調査は国の調査に対する批判から出発しています。

国としての被爆者実態調査が初めて行われたのは原爆投下から20年もたった1965年で、それも原爆被害の全体像を明らかにするようなものではなかったのです。57年に原爆医療法、68年には特別措置法が施行されましたが、その支援措置も、医療面のみの施策だったり所得制限等さまざまな制約があったりして、被爆者が本当に求めてきたものとは食い違っていたように思います。原爆の被害は身体面だけではない。思うように働けないところからくる病氣と貧困の悪循環もありますし、社会的な差別もある。被爆者として生きることそのもの、とりわけ精神面の傷が深いんです。「あのとき水がほしいと求める人たちを蹴飛ばして逃げてしまった」、「死の恐怖に襲われて子供を見殺しにしてしまった」、「こんな自分が生きていて申し訳ない」と、多くの被爆者が苦しみながら心に秘めていた思いを初めて口にしたのは、被爆後何十年もたってから。それほどまでにその体験は、被爆者にとって辛く、重いことなんです。

**被爆者のためという意識ではなく
自分にとって納得できる人生を生きるために活動をつづける**

足羽 辛い体験を抱え込んでいらっしゃる方に誠実に聞き取り調査を重ねていくことは、調査する側も追体験を常に迫られるような大変なことですね。10年以上も継続して調査に参加された間に、ご自分のなかでなにか変化はありましたか。

栗原 最初は、もう被爆者のお話に耳を傾けるだけで精一杯。正直いって長崎に通う足が重くなることもありました。でも、卒業後、社会調査室の助手として調査をつづけるうちに、この方々の思いや体験を聴いた者としては聴きっぱなしにはできないと思うようになったのです。石田先生の研究は、問題を抱えている人たち自身がその解決に立ち向かう思想的営為に着目した実証的な研究で、そこが魅力でした。でも、自分は今後どういう立場で被爆者の問題と関わっていくのかを考えたとき、自分が選ぶのは研究者ではないと思った。性格的にも緻密な学者タイプではありませんし(笑)。私が関われる場は、大学以外にもあると思うようになったのです。1977年に国連傘下のNGOが主催して“人間の顔をしたシンポジウム”と言われた『被爆問題国際シンポジウム』が開かれたことも、この思いを加速したように思います。先ほどお話した被爆



原爆により破壊された教会遺跡前で

者たちの秘めた思いが次々に語られたのが、このシンポジウムに先駆けて行われた1万人規模の全国調査でした。原爆の引き起こした地獄が人間の心にどれだけ深い傷を残すのか、この調査を通じて改めて教えられました。

足羽 1980年に大学をやめて、被団協(日本原水爆被害者団体協議会)の事務局に入られたのは、なぜですか?

栗原 そうですね。被爆者と一緒に活動したいという気持ちが強くありました。被団協に約10年勤めているあいだに、被爆者が何を願って運動をしているのか、それに対して日本政府はどのような対策で応えてきたのか、あるいは応えてこなかったのか、といったことを目の当たりにしてきました。被爆者が一番願っているのは、「自分たちが味わった苦しみを二度と誰にも味わせたくない」ということ。この基本要求すら、すんなり通らない。国が始めた戦争で国民に犠牲が生じたとしても受忍すべきだという考えが政策の根底にあり、政府は原爆の犠牲者に対してすら被害を補償しようとしません。

足羽 1982年の国連軍縮会議にむけてニューヨークで世界中から反戦・反核運動者があつまって開いた100万人集会に広島・長崎の被爆者

の方々が初めて集団で参加し、それが世界に反核を訴え、国内問題を世界の問題へと転換させる一つのきっかけとなったと聞いていますが、栗原さんは



足羽與志子 (あしわ・よしこ)
社会学研究科教授





そこにおられましたか？

栗原 ええ。私も事務局として被爆者の方々とニューヨークにいました。被爆者の「誰にもこのような思いをさせたくない」という思いを世界につなぐ自信にもなりました。

足羽 私が研究するアジアの紛争地域の人々からは、ヒロシマ・ナガサキの経験についてよく聞かれます。

栗原 被爆者の問題が人間に共通する問題として理解されるのはむしろ海外の方かもしれません。

足羽 こうした仕事が大変だとは誰もが思っても、実際に携わっていくことは経済的にも精神的にも代価が少なくないと思えますし、政治的な色眼鏡でみられることもあるはず。こうしたなかで栗原さんがずっとつづけてこられた原動力は何でしょう。

栗原 被爆者のためにやっているという意識はありません。自分一人のできることは限られているけれど、自分自身に納得できる生き方をしたいと思いつながりながら取組んでくる過程で、多くのすばらしい人たちに出会うことができました。それが私を支えてきた、というのが正直な気持ちですね。



動をつづけていこうと計画なさった？

栗原 社会保険労務士の資格を取ったのは辞めてからです。辞めた時点では、具体的な計画は何もなかった。「いいね女は、家族を養わなくていいから」と言われたこともあります。私、かなりアバウトなんです（笑）。

足羽 ご自分の見極め具合が鮮やかですね。私がいまの学生を見ていて気がかりなのは、社会に出るときにあまりに戦略的で、最初から定年後までの人生設計があるのではないかと。しかも「成功のコンセプト」は最初から決まっていて、価値観の幅があまりに狭い気がします。失敗から学ぶ覚悟と情熱に支えられた粘り強さと、自分一人でも立つという潔さがなかなか感じられないのが残念です。

栗原 目標をもつことは大事ですが、いろんな価値観があるということはキチンとわかってほしいですね。上昇志向をもつこと自体は悪いことではありませんが、そこにこだわるあまり人を蹴落としてもというのは戦争へと走る思想と共通するものがあるように思えます。そこにかからぬ捕られないようにしてほしいですね。

足羽 栗原さんの生き方のなかで私が感動するのは、相手と自分の両方に正面から誠実に向き合い、個人としての活動を継続していらっしゃることです。広島市の平和記念公園に新しくできた原爆被害者祈念館は個人史の集積を正確に残すことが平和祈念になるという、コンセプトの大変優れたものと私は評価しているのですが、そこで栗原さんのお仕事が大変役に立っていると聞きました。栗原さんが発行していらっしゃる被爆者の自分史を掲載した『自分史つうしん ヒバクシャ』は、いま何年目ですか。

栗原 1993年の2月が創刊ですから、10年を超えました。被爆から58年たつて、亡くなられる方が多くなってきましたし、いずれはみなさん亡くなってしまふ。少し焦りを感じています。戦争とは何だったのか、被爆者たちは何を苦しみ、どう生きてきたのか、生の証言を残し、次の世代に引き渡していくことが大切です、いましかできないと思っています。核兵器を否定し、国の戦争責任を問いつける彼らの声こそ、次代への何よりの遺産です。『自分史つうしん ヒバクシャ』には、応援して下さる方がたくさんいる。読者の半分は一般の方で、寄せられるメッセージを読むと背中を押され、継続へのエネルギーが湧いてきます。

自分にできる、やりたい仕事をマイペースで「生の証言」を次世代に手渡す

足羽 被爆者調査に関わった大学時代について、内側から支援した被団協時代と、組織のなかで直接被爆者に接してこられたのに、1991年に事務局を辞め、個人として活動を始められたのはなぜ？

栗原 被爆者の団体は、抱えるテーマは大きいにお金も力もない（笑）。事務局の仕事も限りなく、昼も夜もないような日々を過ごしてきました。40歳を過ぎて、これからの自分に何ができるのだろうと考えたとき、もっとマイペースで被爆者が生きた軌跡を残す仕事をしていきたい、と思うようになりました。

足羽 その後、社会保険労務士としての仕事のかたわら個人として活

対談を終えて

戦後60年は原爆投下からの60年。被爆者の方々の人生の重さを、また国家や組織の重さを、全身で受け止めてともに歩んでこられた栗原さんは、穏

やかで凜とした佇まいの方でした。長崎の魅力から政治や人の繋がりかたなど縦横に熱く静かに彼女が語った2時間余りの対談内容を紙面に書ききれないのが残念です。人の生き方の記録が普遍的メッセージとなる、聞くこと、そして聞いた者の責

任としてその地道な作業を続ける彼女に、一橋の女性に誇りを感じた瞬間です。取材のために栗原さんと石田ゼミの1年先輩の濱谷教授のお二人に長崎の平和祈念公園と街を案内していただき、ほんとうにありがとうございました。（足羽環志子）